

緊急レポート

オーディオ・フィジック/スピーカーシステム

精密な理論が作り上げた 世界で最も静かなスピーカー

本機はフルレンジ・ユニットとアクティブ・サブウーファーの変則2ウェイ。数々の特徴を備えているが、中でもフルレンジに使われているマンガー・ユニットがユニークだ。

マンガー・ユニットというのは20年前にド前にドイツのヨゼフ・マンガー博士が発明したスピーカー・ユニットである。通常のコーン型スピーカーには、どうしても避けられない宿命のようなものがある。それはコーンを制動するダンパーやエッジなどのスプリング材と信号による駆動力との関係である。コーンはピストン運動を行うが、その折り返し点では必ずスプリングによる過剰な力が加わっている。例えば信号が止まってもそこでコーンがびたつと止まるわけにはゆかず、

なんらかの余分な振動が生じてしまうのである。これをトランジェント(過渡的)効果と呼び、スピーカーの音質に大きな影響を持つものとされてきた。

マンガー・ユニットは従来のコーンとは全く異なり、3層から成る薄いフィルムで形成されている。そしてこのフィルムのエッジと中心の中間辺りを駆動する形になっている。エッジやダンパーで振動板の動きを制御するわけではないため、トランジェント効果は生じない。フィルムは全体に波打つように動作し、この過程で分割振動も吸収されてしまう仕組みになっている。また九角形の星形の枠が超低域の振動も吸収してしまいうため、信号以外の余分な振動を発生しない。

このマンガー博士の開発を、オーディオ

オ・フィジック社のヨアヒム・ゲアハート社長が受け継ぎ、製品として完成させたのがMEDEAである。

MEDEAではこのマンガー・ユニットをほぼ100Hz以上のフルレンジとして使い、これにアクティブ・サブウーファーを組み合わせた構成になっている。さて本機の調整は重量のせいもあって大仕事だ。一度セッティングしてしまう

と一人で動かすのはとうてい不可能。大体の目安は、壁からある程度離すことを前提として、左右はなるべく大きく取り、リスニング・ポイントとの距離も長くする。そして向きはかなり内側に振るのがポイントだ。よほど広い部屋なら真正面でもいいだろうが、音場的なものを求めるなら内向きにした方がよさそうだ。無限大バツフル同等の効果ははつきり現れるのである。なお試聴はエソテリックP12sからソニックフロンティアSFD-2II、ACデザイン「コンクルージョン」、ラックスマンB-110を機材として使用し、ケーブルは全てACデザインとした。

まずマンガー・ユニットのフラットな



この不思議なマンガーユニットが本機の目玉。聴覚生理学の研究をベースに開発されたもの。これをフルレンジ的に使い、アクティブウーファーを付加

ことに驚かされる。高域まで極めて伸びがよく、凹凸が全くない感じだ。最初バリエーションがややきつく感じられたが、これはクロスオーバーを調整することで解決した。ピアノは実に芯が詰まった印象で、音に充実感が溢れている。コーラスの美しい余韻とハーモニーも十分魅力的だ。室内楽でも同様で、チェロには輝かしい艶があり、各楽器の分離もいい。そしてオーケストラの合奏は迫力満点だ。フォルテの中で聴かれる打楽器がとりわけ鮮烈で、全体が団子にならずきちんと分離され、鋭くはあるが決して耳障りではない。非常に高域までフラットに出ていることがわかるのである。

このユニットは80Hz以上で使うことができるくらいだから、量感さえ求めなければ全くのフルレンジでもいいわけだ。その広いレンジを一本でカバーできることによって、位相や干渉も問題は完全に回避されている。周波数だけでなく、あらゆる点でこぼこの感じられない実に滑らかな特性が得られているようだ。サブウーファーは、低域の量感を増し表情を豊かにするための補強と言えよう。だから過度に強調するのは逆効果。同社では本機を「世界で最も静かなスピーカー」と呼んでいるようだ。事実、余分な音が全く聴こえない。精密な理論が造り上げたレファレンスである。(井上千岳)

メデア ¥3,900,000 (1セット・受注生産) 上部ウーファー部、ベース部の3ピース構成。反対側面にも同様のユニットが配置される

